

機 鋒

TOUGEN NEWS

2月1日(水曜日)

発行所 桃源院
発行責任 桃源院 広報部
〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4
〒987-1304 大崎市松山千石本丸49
編集 富田琢磨 田中高文

http://www.momo.or.jp/



十返舎一九
この世をば
どりやお暇に
煙とともに
線香の
灰左様なら



この世をば
どりやお暇に
煙とともに
線香の
灰左様なら

お線香



仏事には大切な基本の三種類のお供え物があります。「香華灯燭」といい、最初にお線香の香りです。そしてお花の美しさとロウソクなどの光です。

香りは仏に捧げるだけではなく、その香りは線香を焚く本人はもとより、まわりの皆にゆきわたります。あたかも、仏の慈悲と同じように四方に無限に広がり、喜びと安らぎで私たちをつつむのです。

また、線香の香りには、身体や、その時を、そしてその場を清める作用があると考えられてきました。ですから線香を焚いて、身体や心の汚れを払い。清浄な心でみ仏にお参りするのです。

仏事や葬儀などで線香を含め、香を焚くのは、仏さまと私たちとがともに清浄な信仰の場で向き合い、清らかな仏さまの慈悲をいただき、そして敬虔な信仰を捧げる儀式なのです。

お線香 香りの徳



伽羅など、東南アジアの特定の植物が、内部に含んだ樹脂を切り出して乾燥させたもので、同じ種類でも必ずしも香木が取れるとは限らず、まさに貴重な自然界からの贈り物です。

線香の種類

「杉線香」杉の葉の粉末を原料に製造されます。杉特有の香りの強い煙の多い線香で、主にお墓用の線香として使われます。しかし、ドライアイスのなかった時代には、葬儀の時に、棺の前で多量に焚かれました。臭い消しの役目もあつたんですね。



線香の供え方

まずロウソクに火を点し、次に線香をロウソクの火で点火し、香炉に立てます。線香の火は、口で吹き消すのではなく、手であるいは消すようにします。人間の口は、悪口を言ったり、とかく悪業を積みやすく、汚れやすく、また口臭もありがちなので、仏さまに供える線香の火を消すには不浄だからです。

線香よもやま話

落語で桂米朝の「たぢぎれ線香」の冒頭にもありますが、花街では、芸者さんの花代のことを線香代ともいいます。これは、線香一本がとる間を単位に、時間を計算したからです。その線香は、帳場に置いた大きい香炉に立てていましたので、帳場のことを線香場とも呼んでいました。

お香典の意味

もともと香典というのは、霊前に供えるお香の料(代金)です。昔はお香を持参したのですが、今は喪家側で用意するようになったために、その代金として現金を包んで持参し、霊前に供えるようになりました。現金では失礼とする考え方もありますが、現在では不時の出費に対する相互扶助の意味合いも強くなり、現金を包むことが一般的になっています。

線香の歴史

遠い昔に中央アジアで誕生しました。東南アジアに生息する香木など沈香がお香やお線香の原料となることがあります。日本では日本書紀に香木

の存在が残されています。我が国のお香の始まりは六世紀、仏教とともに渡来したとされています。現在の形のお線香は、江戸時代に中国から製法

が伝わり、使やすいくとで広く普及しました。香木と漢方薬、糖の木などを練り上げて作り、原料やその比率で、それぞれのお線香の特長な香りが決まります。香木は、白檀・沈香・

「匂い線香」樹の木の樹皮や葉の粉末を結合剤に、各種の香木や香料を加えて製造されます。現在広く家庭や寺院で使われている線香です。長さの種類はいろいろあ

り、14センチの短寸、16センチの中寸、25センチの長寸、33センチの大薫香、54センチの中天香、66センチの大天香などがあります。

坐禅のときは、時間を計るために線香を一本立てます。一回の坐禅は約四十分です。これを一炷と言います。ちょうど長寸の線香が点火している時間です。

「一本立ち」という言い方があります。これは芸者さんがこのお線香一本燃え尽きる時間を接客できるようにまで成長するという意味だそうです。





法光寺三重塔(承陽塔) 南部町

八戸市類家町にある寺である。そうしてこの寺の住持、金童和尚の弟子になり、金英という僧名をもらった。この名前は移山が後に小田原の海蔵寺、月潭全竜和尚に参じた際、金英の金を礎に改めてもらい、その後ずつと蓮英と称した。

最初の師、金童のもとで金英は懸命に勉強して、やがて上座になった。それから金童が法光寺の住持になったので、金英も随従して法光寺に移った。ところがまもなく、師の金童は病んで半身不随になった。そこで金英の兄弟が師の代理をつとめた。この兄弟は寺の近くの後家さんとくっついていて、後家さんがときどきお寺に忍んで来て二人で酒を飲んだ。ある夜のこと、後家さんがあんまりガブガブ呑み過ぎるので、兄弟の坊さんが、「今夜は、へんにガブガブ呑むじゃないか」

「坊さん、あたしや、逢わぬつらさで呑みます」後家さんはこう言って、またガブガブやり出す。兄弟は少々照れ臭くなつて、そばにひかえた金英に、「おい、小僧、おまえもここに来て一杯やれ」

「はい」

金英はこう言って、堂々と盃を取り上げて、ガブガブと呑みだした。兄弟も後家さんもあつげにとられた。

「おい、小僧や、酒がそんなに強いのか？」

「はい、私は、粟のつらさにやけて呑む」

兄弟はいよいよ度胆を抜かれて、「こいつとつぶやいた。お寺で毎日粟の飯ばかり食べさせられるので、後家さんの口調をまねて、粟のつらさで呑む、とやったのだ。それが金英、十六歳のときであった。」

こんなところにぐずぐずしてはいてはお母さんの言われた通り、地獄ゆき

の案内人になりかねない。兄弟子と後家さんの飲む酒を夜な夜な買っていくようなことはもうごメンだ。

そこで金英はこっそり寺を抜け出して江戸へゆこうとして出舟を待っていると、法光寺と実家の両方から追手が来て連れ戻されてしまった。

しばらくして、病臥中の金童和尚が死んだ。逢わぬつらさの兄弟子がその後を継いだ。

そこでいよいよ決心を固め、再び逃げ出して仙台的の松音寺を頼って行った。それが天保十二年のことである。

この仙台時代に天保の大飢饉があった。天保十二年のことである。飢え

死にした者や、まだ死にきれずにいる者が一丁ごときに道に横たわつていたと言われる。金英はそれとを乗り越えて歩いた。まつ暗な夜はさすがに無気味だった。この世の悲惨と恐怖とが交錯した。大金をふところ抱いた人も見た。当時の東北地方の飢饉は想像を絶するものだった。そんな状況で、仙台的の松音寺にいても勉強が出来ない。そこで意を決して江戸へ出て来た。江戸に着くや、直ぐに駒込の吉祥寺にある梅檀林に入った。ここは曹洞宗の学問研究所であり、現在の駒澤大学の前身である。

その頃は世間も、金英



駒込 吉祥寺



桜の松音寺 仙台

もひどく貧乏で、食糧を得るために毎日托鉢に出かけた。それから本を読むために、毎日下谷の池の端の本屋へ行って店先に腰をおろし、そこで好きな本を読み、要点を筆記した。彼は書物に深く取り扱って手垢や折り目のつかないように気をくばった。店の番頭もその熱心に打たれて親しく話をするようになった。ついに古本や新本を寮へ持ち帰ることを許された。毎日、店先に腰をおろされては迷惑だったのかもしれない。

その頃、吉祥寺の門前に、菊池竹庵という儒学者が住んでいた。もとは信州松本藩の儒者だったが、独立不羈で藩侯の前へ出て講義するのが窮屈でたまらなかつた。

「君、君はあの不行儀先生のところに通っているのだが、止めた方がいいぜ」

同学の連中のなかに忠告する者があつた。

「不行儀先生が何でいけない？ 私が菊池先生のところにいくのは何も不行儀見習いのためじゃない。

でたまらず、縁をすてて浪人となり、清貧に甘んじて自適の生活をやっていった。なりふり構わぬ人なので、不行儀先生という仇名があつて、だれも教えを受けようとする者がなかつた。

ただ一人、入門者が現われた。梅檀林の青年僧、金英という大柄な男であつた。彼は菊池先生の元にせつせと通つて聴講した。

新しい香りのお線香

故人の好きだった 趣向にあった香りを・・・

何でも作れる時代、故人の好きだった食べ物の匂いもこんなふうにお線香になってしまいました。

そのうちに、ステーキやサンマ、焼き鳥などの匂いのお線香も出来るかも知れません・・・



チョット 自慢 (´へ´)!! えっへん

半導体を製造する設備の大半が日本で作られているか、または主として日本で作られているそうです。半導体の回路を焼き付けるステッパーは、3分の2がニコンかキャノン製。携帯端末やラップトップパソコンに使われる樹脂「BTレジン」の約90%、世界のコンピューターチップに使われるシリコンウェハーの60%は日本から輸出されている。今、国際的な部品調達網に日本が与える影響の大きさをアメリカのそれと比較すれば、グローバル競争の本当の勝者はアメリカではなく、日本だったことは明らかなのだそうです。

稀に見る近代国家日本には世界一の技術力があって、世界中の工業国は日本なしには成り立たないのです。技術の裏付けになるのは、企業の研究開発費が非常に大きいことがあります。企業経営者が株主への配当を後回しにして、研究開発費に投資しても許される。逆に、常に研究開発して新製品を市場に投入し続けないと、ライバルメーカーに負けてしまう。そうした競争が非常に国内で激しいのです。

日本の国内産業では、寡占状態になっているような業界が少ないのです。自動車でも、携帯でもひたすら競争が激しい。(宅配でも、ピザ屋でも競争は大変だけれど) アメリカや韓国では、国内企業の寡占化が進んでいます。寡占化して市場を独占状態にしてしまえば、競争しなくていい。研究開発なんてアホくさいとなります。株主は配当を多くしろということになります。

国内で健全な競争社会があって、それを外国に向けてやり続けたら、いつの間にかトップにいた。経済面でも最大の資産保有国家になっていた。日本ではGMやサムソンみたいな、ガリバー企業を求めない。たぶん国民性なのでしょう。判官鼻根のように弱くても頑張っている者を助けてしまう。一方的に強者をヒーローとして尊敬するよりも、小さくても光るなら応援する。日本なら中小零細でも技術力があるなら評価されてしっかり仕事が出来ると。だから、中小零細でも安心して研究開発を続けて新製品を作り出す努力が出来ると。こうした優秀な下請け企業に支えられて日本の大企業も強くなるのです。

もう一つの側面は、日本人の貯蓄好きがあるでしょう。お陰で日本国内に必要な資金を調達できていた。米中韓のように外国からの資金がないと、経済が回らないという事態にならなかった。アメリカの経常収支は金を借り過ぎて末期的、だからトランプ新大統領の政策が出てくる。中国の輸出の半分は外資系企業、韓国は2度も破綻しました。今の日本が自国の円建てだけで国債を発行して、膨れあがる対外資産を持つというのが対照的です。外国から金を借りたら高い利子を払って外国に返すのですから、効率が悪いのは当然です。

また、禅文化に育まれてきた自分に向き合う人間性もあります。知識を蓄え、技術を磨く。「一生が勉強・一生が修行」と言い切る国民性です。

単一言語を通じて、国情が安定している国家、それは日本。国民は貯蓄好きで、その資金が研究開発に潤沢に回せる。知識を求め技術の向上を求め続ける民族。国情が安定しているから企業家は安心して長期計画でモノ作りをやる。この状態で気がついたらノーベル賞でも裏打ちされる学問もまた企業の技術も、もの凄く高いレベルになっていたのです。

鎖国の頃、江戸幕府の軍力とそれを支える経済力は世界最強だったそうです。家康の鉄砲配備数や配備率は、当時の欧州列強では比喩物にならないくらい高い。輸入した鉄砲をすぐに国産化して、極めて大規模に配備するという技術と資金が家康にはあったのです。他国を排して、そのまま鎖国を数百年間維持していたのですから、アジアで唯一列強の植民地にならなかった下地が既にできていたのですね。

最後に、創業100年以上の企業数は日本にどれほどあると思いますか？ 2位のドイツは1500社、3位はフランスの330社、日本は驚きの570社以上と桁違いの数。世界最古の企業の「金剛組」は、578年創業。世界最古のホテルは「慶雲館」705年の開業です。

眼蔵の巨人

オン ニコニコ 腹立てまいぞ 薩婆訶訶

西有穆山(にしありぼくざん) (一八二一—一九一〇)

曹洞宗。本名金英。穆山は号。陸奥(青森県)八戸の生まれ。姓は笹本氏で後に西有に改める。十三歳で長竜寺の金竜和尚について得度、十九歳で仙台の松音寺の天応悦音和尚の教えを受け、二十一歳で江戸の吉祥寺の学寮に入る。浅草の本然寺住職、安窓泰禅和尚の法を継ぎ、東京牛込の鳳林寺、相模の海蔵寺、駿河の如来寺などの住職となる。明治八年、青森の法光寺に転住し、さらに北海道札幌の中央寺、静岡県の可睡斎に移り、後に横浜に西有寺を開創。明治三十四年、大本山總持寺住持となり。明治三十五年、曹洞宗管長となる。道元禅を究め、近代の稀有の眼蔵家といわれる。享年九十歳



文政四年十月青森県八戸の湊に生まれた。現在の八戸市湊町である。父は笹本長三郎という貧しい小商人だった。長三郎は無類の正直者で温厚だったから、ホトケ長三郎という仇名がついていた。穆山はホトケ長三郎の後妻の子だった。穆山は幼少で出家したから、笹本という姓を名乗ってはいなかった。ところが明治維新になって庶民も僧侶も姓を持つようになったという法令が出たので、あらためて西有姓を創った。『仏祖統紀』のなかの、「西方に聖人有りて出す、其の名を仏と曰う」から引用したようだ。幼名は万吉である。三才のとき、母の実家の西村家に養子に出された。ところが六歳になったときに養子先の西村家に子供が生まれたので、案の定、万吉は邪魔もの扱いされるようになった。居場所のなくなった彼はひよっこり実家に帰ってきた。三才のときに里親に連れられて行ったきりに、どこをどうやって帰ったか覚えていないと記述している。「おらあ、やっぱり父ちゃんとお母ちゃんのそばがいい」「なに、お前の父ちゃん母ちゃんだと。そりやまた誰のことだい」「おらあ、ちゃんと知っている」「まあ、この子は、お前だから聞いたね」

「うん、だけれども聞いてねえ。母ちゃんの乳を飲んだことも、向こうの父ちゃんに連れられて、この家を出て行ったことも覚えてる」
それから両親がどんなにだめても、万吉は西村家に帰ろうとしなかった。やむなく両親は西村家にとわりを入れて、万吉を引きとってしまった。西村家では跡取り息子が出てきて、万吉を疎んじていた矢先だったから、この交渉は西村家にとつても渡りに舟だった。実家には兄が一人いた。ホトケ長三郎の先妻の子である。この兄はどちらかという、ボーッとしていたから、両親も何かにつけ万吉の方を重く見た。親類や近所の者が集まるようなときにも兄よりも弟の方に衆目が集まった。「おらがここには兄ちゃんが気の毒だ」万吉は頑固な子だが心も痛めていた。万吉が九つときの夏、母につられて、近くの願栄寺というお寺におまいりしたときにこと。それはお盆の日であった。願栄寺に地獄極楽の掛け軸がかかっていた。「母ちゃん、これは何の絵？」
「これは地獄の絵で、お前のような言うことの聞かない、悪戯ばかりする子が死んでから行くところ(地獄)です」
「お母ちゃん、これは何の絵？」
「これは極楽といって、



善いことをした人が死んでから行く楽しいところ(極楽)です」
「じゃあ、母ちゃんは極楽に行くんだね」
「いいえ、わたしは地獄にゆきます」
母はきつぱりところう答えた。
後に穆山は少年の日を回想して、この母親の一言に対して無限の感謝を捧げたということです。母はそれに続けてこう言った。
「お前たちが可愛くてどうしても罪をつくるから、わたしも地獄よりほか行くところがありません」
どうしたら母ちゃんを地獄にやらずにすむか。どうしたら兄ちゃんにお父ちゃんのとを継がせて

「万吉、この辺のお坊さんには地獄行きの案内人がうようよしています。お前も地獄行きの案内人になるようなら、坊さんなどにはならぬことだよ」
「いや、母ちゃん、俺は必ず母ちゃんを極楽につれて行きます」
万吉は実に意気揚々としてわが家をあとにして、笹本家の帰依する曹洞宗の長竜寺へ向かった。

ることができぬか。少年の頭に、この二つのテーマがからみ合せて走馬燈のように回った。
そして、「そうだ、坊さんになろう」と万吉は心に決めた。
『一子出家すれば一族三代平安、極楽往生』というような言い伝えが、田舎の信心深い庶民のあいだで語られていた頃のことです。万吉は母や大人たちの口からこれ聞いてその意味を知り、自分が出家すれば笹本家は兄が継いで栄えるだろうし、母も地獄に行かず済むと思った。
万吉十三才のとき、母はついにわが子の願いを許した。おとなしい父は、なんでも母の言いなりになった。
いよいよ万吉が風呂敷包み一つ持って家を出ようとするときに、気丈な母は万吉をじっと見させてこう言った。
「万吉、この辺のお坊さんには地獄行きの案内人がうようよしています。お前も地獄行きの案内人になるようなら、坊さんなどにはならぬことだよ」
「いや、母ちゃん、俺は必ず母ちゃんを極楽につれて行きます」
万吉は実に意気揚々としてわが家をあとにして、笹本家の帰依する曹洞宗の長竜寺へ向かった。

大般若御祈禱会



当院に伝わる
大般若経 六百巻



こっちは、むこうの知識が欲しいだけなんだ」金英はこう言って、雨の日も風の日も出かけて行った。浪人で尾羽打ち枯らしても、江戸の最高学府、昌平坂学問所を出た博学多識の学者だから、講義は非常に面白かった。真夏の午後のことであつた。菊池先生は、「熱いな、どうも、こりやたまらぬわい」と言って、いきなり素の裸になり、越中ふんどし一枚で見台の前にあぐらをかいた。洩ちわを手にして得意の講義だ。不行儀先生の本性が百パーセント現われた。



「何だ、貴公、貴公はこの暑いのに綿入れを着用しておられるのか」不行儀先生は講義を中止して、素っ頓狂な声を発した。「禅坊主というものは変ったことをすると聞いておるが、酔狂にも程がある。おれはかくの如くある裸になつても、なお暑くてたまらぬのに、綿入れとは何じゃ。汗のように汗が流れておるぞ。つまらん瘦せ我慢はよせ」

「いいえ、先生、瘦せ我慢などではありません。実は私は毎日、街中を鉢鉢して食物と学費を得て

います。その金英の坊主頭から盛んに湯気が立ちのぼっている。顔からは汗が滝のように流れている。「何だ、貴公、貴公はこの暑いのに綿入れを着用しておられるのか」不行儀先生は講義を中止して、素っ頓狂な声を発した。「禅坊主というものは変ったことをすると聞いておるが、酔狂にも程がある。おれはかくの如くある裸になつても、なお暑くてたまらぬのに、綿入れとは何じゃ。汗のように汗が流れておるぞ。つまらん瘦せ我慢はよせ」

「汗で臭くなりまして、晴れた夜に洗濯して朝まで少し乾かします。あしは着ているうちに乾きます」

「なるほど。しかしそれはあまり良い知恵ではない。わしが教えてやる。その綿入れの綿を抜くので単衣が二着できるのではないか。冬になったら再び縫い合わせて、綿を入れる、元の綿入れになる」

大般若会とは、

大般若経六百巻を転読することで、「般若経」の空の教えを体得し、すべての苦厄を消え、内外の怨敵を退散させ、五穀豊穡や国家安寧や平和を祈念し、人々を運福招福な幸福な生活に導くことを目的とした法要です。本堂の須弥壇上には、十六善神の掛軸が掛けられます。真ん中にはお釈迦様、右手には、獅子にまたがった文殊菩薩。智慧を代表する仏様です。左手には、象に乗った普賢菩薩。慈悲を象徴する仏様です。次に、お釈迦さまの左右に八人ずつ、剣や槍や斧などを持った恐ろしい顔をした方々が描かれておられますが、これは十六善神と申します。このほか、やさしいお顔の法涌菩薩、泣き顔をした常啼菩薩、ともに深い因縁のある菩薩さま方です。



一番手前、向って右に、お経を背負ったお坊さん。このお方が大般若経をインドから中国に持ち帰って、漢文に翻訳された有名な玄奘三蔵法師です。その他に赤鬼のような恐ろしい深沙大王、この方は、非常に恐ろしい悪鬼でしたが、悪心を捨てて善心を起こし、今までの悪鬼が仏法の守護神にかわり、玄奘三蔵の一行を無事に送り届けてくれたのです。それで深沙大王も仏法守護神の一員として祀られたのです。こうした十六善神をおまつりして、法要が行われます。

本堂内陣の僧侶は、六百巻を分担して転読。転読とは心の目で読むことです。はじめに大きな声で「大般若波羅蜜多経巻第〇〇巻」と唱え、経文を誦しつづ、右に3回、左に3回それに前に1回計7回、バラバラと転読し、最後に1回つづ、「降伏一切大魔最勝成就」(一切の大魔を降伏すること最も勝れた成就せり)と願文を大声で唱え、勢いよく経本を置きます。導師は、そのあがりた経典の中でも、最も靈験新たかな五百七十八巻目の「理趣文」という経典を真読し、皆さまの祈願成就・身体健康・家運興隆などを祈願します。大般若経はお釈迦様が説かれた経典の中で最も素晴らしい教えだと言われています。特に大般若経は、経典を転読する時に出る風当たると、一年間無病息災で過ごせると言われます。西遊記の主人公である玄奘三蔵(三蔵法師)が天竺(インド)から持ち帰った大般若の経典を四年もの歳月をかけて漢訳し、全六百巻の「大般若波羅蜜多経」を完成させたので、それをさらに「百六十二文字のお経にまとめたものが『般若心経』なのです。日本に伝えられたのは、七世紀の末頃と言われていますが、この教えが今日までつづいているのです。お釈迦様の思想が経典となり、このような儀式となって、伝えられていることに歴史を感じ、見えない世界の有りかたを喜びたいものです。

桃源院旅行会

- 平成二十八年 八月三十一日(水) 青森白神山 不老し温泉 泊 鶴の舞い橋 弘前城

役員研修会

- 平成二十八年 十一月一日(木) 鎌倉「浄明寺」鎌倉「報国寺」 熱海 泊 十二月二日(金) 相模湖霊園 桃源院東京別院



奥野健也 本山僧堂修行上山

平成二十九年 二月二十一日(火) 総持寺本山専門僧堂 上山

修行は厳格なもので、最初の百日間は特に厳しく、仏道修行に耐えられる人間であるかが試され、そして意識を変えさせられる期間です。脱走する人も必ずいます。身と心を研ぎ澄ませなければ乗り越えられない壁でもあります。



(次号に続く)